



# 藍の色止めの一つとして 柿渋染

令和元年12月分

---

## はじめに

---

寒くなりました。リュウキュウ藍は霜に弱いのですが、元気で無事でしたので、発泡スチロールボックスやプールで染めています。秋の色が染まり、ほっとしています。赤かったタデ藍も茶色に変わってきました。リュウキュウ藍は、根の上から切り、茎はさし木して3～5月までビニールハウスをかけるか、室内に置いて下さい。トマト用の小さなハウスをかけると可愛いピンクの花が咲きます。

たで藍の種を取りましたか？ 製薬研究所の方が書かれた『藍医色同源』という本の中に、藍の効能としてコレステロールや高脂血症が下がるというのがあります。私は、健康のため藍の種のお茶や、わき芽や花をいろいろお料理にして食しています。

夏が終わってからのすくも作り、この頃になって始められた方もあり質問が届いています。温度を上げるのに苦労しておられますが、湯たんぽを使う場合、ポリ製の容器を使用すれば直接すくもの中に入れることができます。沸騰した湯を使いますので満タンにしないよう気をつけます。いずれにしても最初3日くらいは葉と水で発酵温度が出てきますから、温度を高くしたい5～6日目から入れると良いでしょう。

普通は毎日混ぜるのですが、私は今年忙しくて3～4日おきに混ぜましたところ、12月がくるのに温度が下がらず良い調子です。偶然ですがこの方法が良かったのだと思います。混ぜる時には200cc位ずつ水を足しました。固くて混ぜられなくなったら、ナイフなどで刻んでバラバラに砕きましょう。

すくもができましたら、乾燥させてから藍建てを始めてください。すくもを藍建てする時、灰汁の取り方に気をつけてください。灰に湯を入れてよく混ぜてください。小さい見逃しがうまく建たない原因になります。すくもや藍建てをこれから始

める方は、ガイドブックやテキストを読み返して始めてください。9月にお送りした、すくもの新しい方法で作ると色が紫がかって濃く染まります。

藍の乾燥葉は作ったけれど、すくもにはしなかったという方は、来年まで保存してください。虫に葉のみ食われる恐れがありますので、防虫剤などを入れてビニール袋で保存してください。乾燥不足ですと、茶色に変色しますので気をつけてください。

沈澱藍は、3年位保存できます。冷暗所（冷蔵庫に入れなくてもよい）で、保存してください。上に浮いたカスや塊は、使う時に除きます。

---

## 七色を染める

---

3月から始まりましたこの講座も、今回をもって最終回を迎えることになりました。藍の種蒔きから始まって、10ヶ月のさまざまな体験を重ね、種取りを終えて幕を閉じようとしています。作業半ばの方もおられますが、七色のまとめをしようと思います。色環の法則に沿って、色別にたどってみることにします。

（素材：〈シ〉=シルク、〈ウ〉=ウール、〈ナ〉=ナイロン、〈レ〉=レーヨン、〈コ〉=綿、〈ハ〉=大麻）

|            |         |                             |             |
|------------|---------|-----------------------------|-------------|
| <b>赤系統</b> | 漬物法     | 紫がかった赤、ピンクを染める。             | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
|            | 醗酵煮出し法  | 薄いピンクや赤紫が染まる。               | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
| <b>橙系統</b> | 漬物法     | 黄色・茶色が混ざって、オレンジが<br>所々染まる。  | 〈シ〉 〈ウ〉     |
|            | 煮出し法    | 赤紫にならなかった液でベージュや<br>茶色を染める。 | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ハ〉 |
| <b>黄系統</b> | 漬物法     | 醗酵の早い段階で黄色を染められる。           | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
|            | 醗酵煮出し法  | 醗酵が過ぎるとベージュ色になる。            | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
|            | 乾燥葉煮出し法 | 茎や乾燥葉を煮出すと黄・茶系に<br>染まる。     | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
| <b>緑系統</b> | 漬物法     | 黄色から日数が経つと緑色に発色する。          | 〈シ〉 〈ウ〉 〈ナ〉 |
|            | 生葉ジュース法 | ジュースにした液に消石灰、灰汁を入           | 〈シ〉         |

れ、アルカリ性になると緑色になる。

|            |        |                                    |                        |
|------------|--------|------------------------------------|------------------------|
| <b>青系統</b> | 生葉ジュース | そのまま染められる。                         | <シ> <ウ>                |
|            | 藍建て法   | 生葉、乾燥葉、沈澱法、すくも、<br>いずれも藍建てして青を染める。 | <シ> <ウ> <レ><br><コ> <ハ> |
| <b>紫系統</b> | 漬物法    | 漬けて発酵が進むと紫が染まる。                    | <シ> <ウ> <ナ>            |
|            | 醗酵煮出し法 | 赤紫や紫を染める。<br>染め重ねると濃い紫が染まる。        | <シ> <ウ> <ナ>            |
| <b>無彩色</b> | 漬物法    | 麻や綿で灰色を染める。                        | <コ> <ハ>                |
|            | 生葉煮出し法 | 沸騰寸前に灰色が染まる。                       | <コ> <ハ> <シ> <ウ>        |

※生葉煮出し法の解説  
藍の生葉を水に入れて煮出す。40℃くらいで水色が染まり、その後灰色が染まる。沸騰すると赤紫系からベージュ色に染まる。

---

## 藍 と 渋

---

藍と取り組んでしばらくたった頃でした。染めた布や作品を取り出して驚いたことがありました。布を折りたたんでおくと、折り目の色が変わって筋がついていました。もう一度洗い直しても、濃く染め直しても目立ちます。このことから藍が光に弱いことを知りました。

もう一つの欠点は、摩擦に弱いことです。染めたてのTシャツの色が下着についたり、ハンドバッグを汚したりした経験があります。

どうすればこの問題を解消することができるのか、さまざまなテストを繰り返しました。洗剤でよく洗う。ミョウバン水でよく洗う。豆汁で洗う。コンニャク糊をつける。どれも何もしないより良い結果を得ました。中でも、コンニャク糊を染めた糸につけると手に色が着かないし、織りやすいなどの結果が出ました。

それ以上に私の感覚に触れたのは、柿渋で染め重ねたものでした。色止めの目的を超えて、その後渋と藍とを合わせた染めが作品のほとんどを占めるようになったのです。

藍染めをした後、乾かしてから生の柿をジュースにして絞った液に浸けます。そのまま3日くらい干し、毎日4～5回洗っては干しを繰り返して仕上げます。生柿

のない時は、市販の柿渋を使用します。たくさん柿が手に入る方は、渋柿が緑色の時に取り、ミキサーに水を半分入れ、柿を切ってその中に入れて、ジュースを作ります。瓶やポリ容器などに入れ、密封して1ヶ月程置き、布で漉して液のみを取り密封して1年以上置いた後、染めに使います。3年経つとよい色が出てきます。

その他、水は入れずに生柿をジューサーにかけジュースを作り、藍の上に染めると、赤味がかかった渋を染めることができます。

また、渋を染めてから藍染めをすると緑味がかかった布を染めることができます。

---

## 藍 と 墨

---

藍染をした後の布に、松煙染めをほどこして黒を染めることができます。

黒を染めるには、昔から「藍下」といって、藍染の布の上にヤマモモやハレノキ、ハゼ、ザクロ等を染めて鉄媒染して黒色を出していました。

私は自宅で藍の茎や柿の木を焼いて墨を作り、それを粉にして使っていましたが、染料店から手に入る松墨を使って染めることができます。

- ①松煙墨を20gをニカワ液100ccでよく溶かします。
- ②大豆粉100gを1%の水に1時間くらい浸け、布でこして、松煙とよく混ぜ布袋に入れて絞ります。
- ③それをボールに入れて布（藍染をした布）をもみ込みます。20分を2～3回、染めては干しを繰り返します。
- ④最後に、フノリをもみ込んで仕上げます。

鉄媒染を使用しないで黒色を染める方法で仕上げました。また、藍を染めないで白地の布に染めると、灰色になります。

---

## 写 真 解 説

---

**<写真1>** 10年くらい前に染めた芋麻(ラミー)の暖簾です。型染めです。布に型染め用の糊を置き、乾かし、藍染めします。最初は1分で乾かします。その後3～4分を3回染めたら、また乾かします。次に4～5分を3回染めて仕上げます。しばらく染めが浸透してから柿渋染めをします。作って3年くらい置いた柿渋を1、水又は50℃くらいの湯を3としたものに漬けて20～30分置き、夜露に当てて干します。3日以上経つと赤みがかかった色になります。こうして1ヶ月で3回くら

い染めたものです。年ごとにひなびた味を増し、とても落ち着いた技の色で、我が家独特の暖簾として重宝しています。後生に残せるものができたと自負しています。

**<写真2>** 同じように糊を置いて今度は先に柿渋を引き染めします。色が赤茶色になったら糊を落とし、藍染めします。この場合は、藍の所に渋がかかっていますから、青い藍となり、渋の所が緑がかかった藍となります。

**<写真3>** 型染め工程① 型を切る

**<写真4>** 型染め工程② アイロンで紗を張る

2～3時間置いて水道水で洗い流します。表面皮が剥がれますので、流水を勢いよくかけて流すのがコツです。この時白い布を汚さないよう洗ってください。

**<写真5>** 型染め工程③ 麻布に型染め用のりを置く

乾いたら柿渋1に対し、50℃の湯を2の割合でパットに入れ、くり染めします。又は原液を引き染めしても結構です。この場合下地が湿っていた方が良いので豆汁で引き染めをします。10日くらい夜露に濡れたまま外に置き、最後に水洗いをして仕上げます。

---

## おわりに

---

着物に表現された絞りの藍染め、絣織で表現された藍染め、夜具に筒や型で描かれた藍染め、そんな伝統の中で育まれた藍は、すばらしく美しいものです。現代の藍、それも暖簾からタピストリーに、着物から洋服へと移り変わり、色の趣は違っても、またその美しさは日本の色として色褪せることはありません。藍に携わる人々に、この思いをお伝えできる機会を与えていただきましたことを感謝しますとともに、到らなかった点をお詫びして今年度の講座を終わりにさせていただきます。

一粒の小さな、小さな種からいろんなものが生まれました。大きな草に育っているいろんな色をくれました。草の命の偉大さを感じられたと思います。それはまた、体験したことのない作業や苦勞が、そして発見があったから、余計得られた感動は大きく深いものであったと思います。どうか皆様がこの体験をもとに、より美しい自然の色との関わりを求めて歩まれ、自然の染めを通して、良い出会いに恵まれますようお願いいたします。

基本コースでは「染める」という事を重点にお伝えしましたが、研究コースでは、

染めた布をどのように創作していくかに重点を置きたいと思っています。デザインを考え形を新しくして、ファッション性のある創作をしていきたいと思っています。又、いろんな提案やご意見もお寄せ頂けたら幸いです。研究コースはより深く学んでいただけるよう努力致します。皆様のご参加をお待ちしております。

質問用紙が残っていることと思いますので、質問をされる方はどうぞお寄せ下さいませ。また、講座を終えられてのご意見・ご感想なども是非、お聞かせください。



【 同封したもの 】

● 藍と柿渋染めの布 2枚

A (緑がかかった布：先に柿渋で染めた後、藍で染めた布)

B (黒茶色の布：先に藍で染めた後、柿渋で染めた布)

● 写真集 (A 4用紙に写真①～⑤を印刷したもの)